

# 語り継ぐ“ふるさと大崎”総括② 時代は流れて、大崎の地に

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA(原風景)を訪ねる『おおさき今昔物語』。

その、第三十八話は、目黒川がまだ海の一部だった遠い太古の時代から、悠久の時を隔てて、今日の先端的副都心へと至る歴史のあらましを辿ります。

そこには、江戸文化醸成の地から近代工業都市へ、さらには人とまちとの繋がりを求めて変貌する大崎の原風景がありました。



副都心大崎として目覚ましい発展を遂げていくその土壤に、長い歴史が存在した私たちのまち大崎。とくに、各々の時代の特徴として残る出来事や変化を拾い集め、ここに大崎の歩みのあらましとして、ご紹介します。



## 大崎の夜明けがこの頃から

昭和62年(1987年)の大崎ニューシティ竣工が先駆けとなった、新しいまちづくりへの取り組みは、大崎に曙の時代をもたらしました。市街地再開発による「大崎副都心」化の波は、また一方で人



と人、人とまちのつながりを見直すきっかけともなり、「しながわ夢さん橋」などの地域催事へと広がっていったのです。

**昭和62年** 東口第一地区(大崎ニューシティ)竣工、その後、大崎駅周辺地域の再開発が進む

## 物づくりの街、大崎の繁栄へ

工業地帯・大崎の発展に向けた本格的な歩みは、大崎駅開業から始まります。明治34年の開業に伴いその後、「明電舎」を始めとする大正初期の“大崎駅周辺工場進出ラッシュ”は目覚ましいものがあり、立地を生かした近代工業化への進展が進みます。

**大正初期** 明治34年の大崎駅開業に伴い、近代工業都市へ

**明治後期** 目黒川畔への工場進出が顕著に

## 目黒川畔で飛行船が生まれ、飛んだ!

ものづくりのまち大崎の先駆けともなった、「気球製作所」による日本初の飛行船製造と、東京上空飛行。富国日本を支える製造業の地として、大崎・目黒川畔への工場進出が勢いを増します。

## 日本初の洋式ガラス工場が出来た

明治6年、北品川・東海寺境内に日式ガラス工場が誕生。ここから、ものづくり産業発展の種子が全国に広がっていきます。

## 11もの茶室がある“茶園のテーマパーク”「大崎苑」が広がっていた

江戸時代、松江藩主・松平不昧公の江戸下屋敷(北品川五丁目辺り)に、千利休が造った「独楽庵」など、全11室もの茶室(大崎苑)が広がっていました。

**江戸元禄の頃** 大崎は大名のリゾート地に

**明治初期** 明治政府の殖産興業策で、大崎へ工場進出が始まる

## 居木橋に貝塚があった

今から3千年前の東京湾には、目黒川を河口として陸地の奥深くまで海岸線が入り込み、大崎や品川の辺りは海に突き出た半島になっていました。大崎の祖先達はここで魚貝を取りながら生活。寄木橋の貝塚が当時の様子を伝えています。

**縄文時代前期** 居木橋遺跡の発掘調査によって縦穴住居や貝塚が発見され、土器や装飾品なども出土し、品川区の縄文時代を代表する遺跡の一つとなる

